

清和文楽館設計者  
石井和紘さん

■石井 和紘氏プロフィール  
 1944年 東京に生まれる  
 1967年 東京大学建築学科卒業  
 1969年 同大学院修士課程修了  
 1975年 イェール大学建築学修士号  
 // 東京大学博士課程修了  
 // 石井和紘建築設計室開設  
 ※日本の伝統的な建築に対する著作多数

上益城郡清和村に木材をふんだんに使った「清和村文楽館」がオープンしました。この施設は文楽の里づくりの中心施設となるもので、舞台棟、客席棟、そして通路でつながる展示棟の三棟から構成されています。いにしへの古都の寺院を思わせるような外観、梁の木組みが大胆な内部。この文楽館は、江戸末期から続いてきた清和文楽を伝承し、未来へ継承するための新たな拠点となることでしょう。

## 清和文楽館は「平成の夢殿」。 活力と発想力に満ちた 熊本県のあかしと思う。

### 雪が降る中の打ち合わせ まるで忠臣蔵討ち入り前夜

文楽館が完成するまで、五十回くらいはここ清和村に足を運んだでしょう。いや、熊本にはその前からほかの建物を見せていただくため来ていますので、ここ数年来て八十回くらいは熊本を訪れています。

でも初めて清和村を訪れた時は、正直言って心細かった。「今、通っている所が村の中心地です」と言われ、ちょっと寂しくなったりして（笑）。  
 今でもはつきりと覚えています。外はしんと雪が降っており、古い役場の一室で火鉢で暖を取りながら、打ち合わせが行われたことがあります。ところが、寒い中でも出席者の皆さんの熱気はものすごいものがあり、まるで忠臣蔵の討ち入り前夜のような感じで（笑）。「これは、うまくいくぞ」と思いました。

### 後世に継承できる 木造建築物

日本には熊本も含め秋田や長野など多くの林産県がありますが、人口三千八百人の清和村が、これだけの木造建築を造ったということは大変価値があることで、全国的にもあまり例がありません。設計に当たっては、奈良時代以降の木の重なりによって造られる在来工法を生かし、柱や梁には三十〜四十角の材木をふんだんに用いました。正三角形の展示棟は軒高九段、最高部は十三段あり、木造建築としては建築基準法の限度ぎりぎりの高さです。

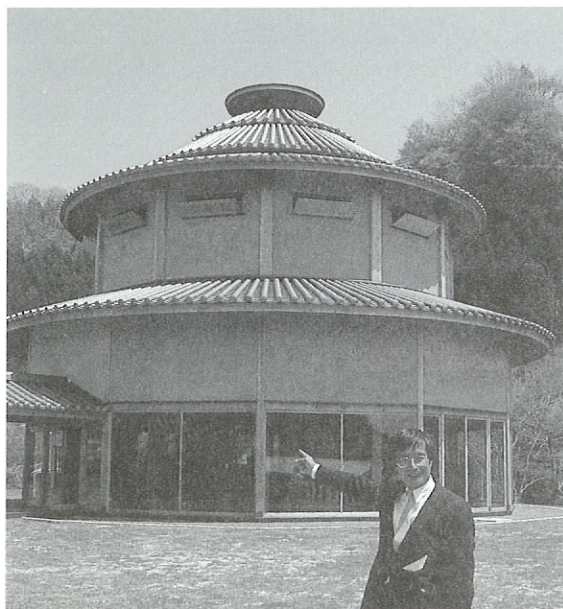
平成の時代に、このような文楽を演じるための建物が清和村に完成したことは、裏を返せば、これだけの施設を造らせた熊本という所が、実は非常に豊かな活力と発想力に満ちた県という証明になったわけです。  
 世界最古の木造建築として知られる法隆寺の夢殿が、仏様をディスプレイ（安置）し極楽浄土を願ったように、清和文楽館の展示棟には文楽人形がディスプレイ（展示）されていることで、まさに「平成の夢殿」と言える存在となったと思います。

### 上棟式で阿蘇の神々に口上 都会人には理解できない 発想と行動

工事を通して特に感激したことは上棟式の際、村長さんが集まった村人に口上を申し上げられるかと思ったら、阿蘇に向かい山の神様に「文楽館に三

千年の生命を与えて欲しい」と述べるんです。私は「これだ」と思いました。大工さんも、左官さんも、瓦屋さんも、そして材木屋さんも、工務店の方も皆さん仕事に頑張られた。そこには阿蘇の山の神々にこの文楽館を捧げるという畏敬の念もあつたのではないのでしょうか。都会人にはこのような発想や行動は理解できないでしょう。

熊本の皆さんへのメッセージとなりますが、この文楽館と対峙する大川阿蘇神社の境内に粗末な芝居小屋があつて、以前はここで文楽が演じられていたと聞いています。この芝居小屋の存在を忘れず、いつまでも後世に残して欲しいですね。



最高部13mを誇る展示棟を背景に石井和紘氏



清和文楽館の門越しに見える建物が、舞台・客席棟。右奥は展示棟。



以前、清和文楽が演じられていた小屋が残る大川阿蘇神社